

中世禪僧の文殊信仰

―語録・偈頌史料を手がかりとして―

上 田 純 一

はじめに

本稿の目的は、中世の禪僧らが抱いていた文殊信仰について、特に時代による変遷の面に注意しつつ、その特色を検討することである。

はじめにこのような研究のもつ意義について多少述べておこう。先に中野玄三氏は仏教美術の研究方法に関連して、次のような興味深い発言をされた。^①

仏教美術が一般の美術と異なる点は、それがかならず仏教の教義のもとに制作されとともに、単に過去に叙述された教義を造形化するだけではなく、その制作された時代の思想による色付けがなされた教義によっていることにある。(中略)したがって、単に様式の変遷をたどればよいというわけではなく、このような様式を要求する社会的背景の解明が、美術史の理解をいっそう深めることになる。

中野氏は、このように仏教美術を思想的に研究することの必要性を主張され、具体的には「ある教義が特定の時代にどのようなように解釈されていたか」、「その信仰の源になった教義の解釈が、その当時どのようなであったか」を知るこ

とが仏教美術を理解する鍵になると述べられたのである。中野氏のこのような主張に対しては筆者も全く意を同じくするものであるが、本稿の立場に即してつけ加えておけば、「信仰の源となった教義の解釈」は時代という要因とともに、更に、宗派・教団の歴史的な性格という要因によっても大きな影響をうけるものであるということが合わせて考慮されるべきであろう。

そして、もしそのように考えられるとすれば、ある時代のある宗派・教団で信仰される仏・菩薩の特色や性格を分析することにより、逆にその時代のその宗派・教団の歴史的な性格を検討することも可能となるはずである。特に、本稿の考察対象とした文殊菩薩は、苦悩に満ちた現世を舞台に活躍する菩薩でもあり、宗派・教団の性格や活動の特色などが反映される度合いは更に強かったのではないかと考えられる。とすれば、なおさらこれは有効な方法になるであろう。中世禅僧の文殊信仰を検討する本稿が、上述のようなことを念頭においていることを、はじめに述べておきたい。

ところで、本文でも述べるように、文殊は禅僧の間では馴染み深い菩薩である。例えば、禅宗寺院では、本尊として釈迦如来や毘盧舍那仏を安置することが多かったが、その場合、脇士としては迦葉・阿難尊者の組み合わせと共に、普賢菩薩・文殊菩薩の組み合わせが配されることも多かったし、また衆僧の坐禅并道の道場である僧堂の本尊にも、僧形のいわゆる聖僧文殊像が安置されていた^③。しかしながら、それにもかかわらず、禅宗や禅僧の文殊信仰がどのようであったかという点について専論した研究となると、これは意外に少ないのが現状である。美術史の分野からなされた個々の作品研究などを別にすれば、まとまったものとしては、現在のところ松浦秀光『禅宗教実尊像の研究』^④が貴重な成果として管見に入るぐらいである。松浦氏の研究は、文殊に関係する史料を広く収集しており、この問題を考える際の基本的な文献となるが、残念ながら、信仰の時期的な推移や他宗派・他教団との信仰内容の差異などについては全く注意が払われていない。文殊信仰は時間的、空間的にも広い裾野をもつものであり、さいわい、平安期の

諸国文殊会や鎌倉時代の歡尊・忍性らのそれについては豊かな研究蓄積もある。禅僧の文殊信仰を論ずる際も、これらの研究との関連に配慮し、その特色を考えることが必要となろう。

一、掲載表の作成方法などについて

まず、掲載した別表について説明しておこう。別表は禅僧の文殊信仰の特色を概観するために作成したものである。作成は次のような方法で行った。まず刊行された禅僧の主要な語録類から文殊に言及した史料を管見の限りで網羅的に抜き出した後、各禅僧の没年を基準として編年整理した。更に、筆者の問題関心から仮に六種の指標（A……五台山との関係、B……仏母的文殊観、C……採薬（治病）関係、D……草衣文殊、E……竜女教化、F……維摩との対話）を設定し、以上の要素の有無を各々の史料について検討した結果得られたのが別表である。その際、前もって述べておくべきことは次のようなことである。各禅僧の語録類には、ほとんどの場合、文殊に関する史料が複数含まれている。作業段階では各要素の有無をそれら個々の史料について逐一検討したが、別表にはそれらの結果を総合する形で記載した。したがって、必ずしも、別表に示したような結果が各禅僧の語録中のある特定の史料に完全に対応しているということではない。

（別表）

作者	作品名		内容	出典
希玄道元	道元和尚広録	A	端午上堂等	道元全
蘭溪道隆	大覚禅師語録	B	端午上堂	大蔵経
無学祖元	仏光国師語録	C	文殊・葉衣文殊・見文殊・端午上堂	大蔵経
大休正念	大休和尚語録	D	文殊（三首）	日仏全
		E		
		F		

作 者	作 品 名	A	B	C	D	E	F	内 容	出 典
白雲惠暁 無象静照 南浦紹明 藏山順空 規庵祖円 一山一寧 約翁德俊 南山士雲 明極楚俊 宗峰妙超 清拙正澄 虎関師鍊 雪村友梅 竺仙梵僊 無隠元晦 竜山徳見 乾峯士曇 竜泉令淬 寂室元光 徹翁義亨 友山士偲 夢巖祖心 中巖円月 此山妙在 天境靈致 日岩長恵	仏照禅師語録 無象静照語録 大応国師語録 円鑑禅師語録 南院国師語録 一山国師語録 仏灯禅師語録 南山和尚語録 明極楚俊遺稿 大燈国師語録 (清拙正澄著賛) 奇北集 宝覚真空禅師語録 竺仙和尚語録 (無隠元晦著賛) 黄竜十世録 乾峯和尚語録 松山集 寂室和尚語録 徹翁和尚語録 友山録 早霖集 東海一漚集 若木集 無規矩 日岩長恵等法語	○	○ ○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ○ ○	○	○ ○	○ ○	梵篋印文殊・聖僧点眼 相模守殿供養 文殊・端午上堂 文殊大士 文殊大士讃・端午上堂 文殊大士 文殊 文殊・端午上堂 送玉知客帰郷 端午上堂・維摩詰問文殊師利 聖僧文殊讃 文殊・文殊童子 綉文殊 端午上堂 騎獅文殊讃 文殊(二首) 文殊大士(一六首)・押行基塔等 謝菰菊二侍者見問病・調薬 文殊大士 文殊・端午上堂 賛文殊(二首) 修文殊堂化縁疏并序 文殊(六首)・文殊大士点眼 穀維那遊方 文殊安座・釈迦文殊普賢等開光安座等 賛文殊・夢礼文殊	大蔵経 五新六 大蔵経 大蔵経 大蔵経 大蔵経 史編纂所 南山録 五全三 大蔵経 南禅寺蔵 五全一 大蔵経 奈良国博 五新三 五新別一 五全一 大蔵経 大蔵経 五新二 五全一 五新四 五全二 五新三 大光寺蔵

作者	作品名	A	B	C	D	E	F	内 容	出 典	
竜漱周沢 春室妙葩 石室善玖 無文元選 通幻寂靈 絶海中津 実峯良秀 天祥一麟 空谷明応 普濟善救 愚中周及 仲芳円伊 義堂周信 岐陽方秀 郭隠慧巖 惟忠通恕 惟肖得巖 不器老人 與可心交 愚極礼才 東沼周滙巖 南江宗沅 龍岡真圭 器之為播 川僧慧濟 一休宗純	隨得集 智覺普明国師語録 石室善玖禪師語録 無文禪師語録 通幻禪師語録 絶海和尚語録 実峯良秀禪師語録 天祥和尚録 仏日常光国師語録 普濟禪師語録 草餘集・語録 懶室漫稿 義堂和尚語録 不二遺稿 南遊稿 繫驢廩 東海瓊華集 (與可心交著贊) (與可心交著贊) (愚極礼才著贊) 流水集 鷗巢贖蘂 (龍岡真圭著贊) 器之為播禪師語録 川僧禪師語録 (一休宗純著贊)	○	○	○	○	○	○	○	題安倍文殊堂 無著見文殊・童相文殊開光明等 文殊師利菩薩像 文殊 總持寺脇土安座 文殊大士・草衣文殊・端午上堂 文殊大士贊 文殊菩薩贊・文殊(二首)等 文殊 端午上堂・薬師文殊供養 文殊・真孝禪人請 文殊大士(六首) 文殊 五字呪写成文殊像為照侍者贊等 次韻再詣五台文殊(二首) 蒲衣文殊・文殊・繡文殊 文殊(四首)・半身文殊等 繡衣文殊贊・草衣文殊贊 文殊贊 騎獅子文殊讚・繡衣文殊贊 奉拜九世戸文殊詩并序 半身文殊 文殊菩薩讚 文殊(三首) 釈迦文殊普賢開光・文殊大士点眼等 繡衣文殊	五全二 大藏經 石室録 大藏經 曹洞全 大藏經 曹洞全 五新別二 大藏經 曹洞全 五全三・大藏經 五全三 大藏經 五全三 五新別二 五新二 個人蔵 東福寺誌 水墨体系 五新三 五新六 東京国博 曹洞全 曹洞全 墨蹟全

(略号・略称)

A……五台山との関係 B……仏母の文殊観 C……採葉(治病) 関係 D……草衣文殊 E……竜女教化
F……維摩との対話

道元全……『道元禅師全集』、大蔵経……『大正新修大蔵経』、日仏全……『大日本仏教全書』、五新六……『五山文学新集』
第六卷、五全三……『五山文学全集』第三卷、史編纂所……『東京大学史料編纂所』、南山録……『南山和尚語録』(一九七〇
年、莊嚴院刊)、大光寺蔵……『宮崎県宮崎郡佐土原町大光寺蔵、石室録……『石室善玖禅師語録』(一九四九年、平林寺刊)、
曹洞全……『曹洞宗全書』語録、個人蔵……『藤井徳義氏蔵(田中一松「與可心交著賛文殊像の二作品」所載)、東福寺誌……
『東福寺誌』、水墨体系……『水墨美術体系』、東京国博……『東京国立博物館蔵、墨蹟全……『大徳寺墨蹟全集』、大徳寺……
『大徳寺禅語録集成』、続群……『続群書類従』

作 者	作 品 名	A	B	C	D	E	F	内 容	出 典
彦竜周興	半陶文集	○	○					維文殊偈・文殊賛・跋文殊経等	五新四
横川景三	補庵集その他	○	○		○			般若寺文殊・文殊賛・梵字文殊等	五新一
天隠竜沢	翠竹真如集	○	○					文殊賛(四首) 銅文殊菩薩開光供養	五新五
景川宗隆	景川和尚語録			○				端午上堂	大蔵経
悟溪宗頤	虎穴集							文殊	大蔵経
蘭坡景菴	雪樵独唱集							文殊大士(二首)	大蔵経
万里集九	梅花無盡蔵	○	○		○			文殊賛(二首)・文殊大士賛	五新五
東陽英朝	小林無孔笛		○					上堂法語	五新六
特芳禅傑	西源特芳和尚語録							文殊安座・文殊大士・梵字文殊	大蔵経
東溪宗牧	大円禅師語録							文殊(四首)	大蔵経
景徐周麟	翰林葫蘆集							賛文殊(二首)・文殊経跋(二首)等	大徳寺
月舟寿桂	幻雲文集	○	○					賛文殊童真像	五全四
		○	○						続群

このような方法については、もちろん問題もあろう。指標として設定した各要素は互いに深く関連しており、このように明確に分離することが果たして妥当であるかという疑問は当然生じるであろうし、それ以前の問題として、史料の見落しも多いだろう。しかも、指標の設定如何によつては、結論に多少の異同の生じることも予想される。また語録という史料の性格の問題（五山系禅僧中心）や残存状況の制約（中世後期の史料が乏少）から考えれば、中世全期を同一の条件で客観的に分析するということは、実のところ、ほとんど不可能に近い。だが、そのような問題や不確定要素は残るとしても、それでもなお、中世禅僧らが抱いた文殊に対するイメージについて一応の概観は得ることができると考えてよいだろう。本稿の目的はその点にある。以下、本稿では、以上のような問題点にも留意しつつ、別表を参考にして中世禅僧の抱いた文殊観にアプローチしてみたい。

二、信仰の中核的要素—（A）五台山文殊との関係と（B）仏母的文殊観—

さて、中世禅僧の語録・偈頌等に現れた文殊信仰を通観して、まず第一に指摘しうる特色は、（A）五台山文殊への強い関心と、これと密接な関係をもつ（B）仏母的文殊観の広範な存在である。別表から明かなように、これらの要素は、今回検討した語録類から広範に検出された。例えば、検討対象とした禅僧七八人のうち、（A）の要素は四〇人の約五一パーセント、（B）は四二人の約五四パーセント、（C）は一九人の約二四パーセント、（D）は一七人の約二二パーセント、（E）は二人の約一四パーセント、（F）は九人の約一二パーセントから検出されるが、（A）および（B）要素の検出比率は圧倒的に高い。おそらく、これらが禅僧の文殊信仰の中核をなすものであったと考えられる。したがって、まずこれらの点から検討してみよう。

個々の作品について一々挙証する事は煩雑になるので控えるが、管見の限りでは、各語録中には「五台山」・「五頂山」・「清凉山」の語やそれを推察させる語句が大部分のものに含まれていた。一、二、例をあげれば、天境靈致

「無規矩」「文殊」^⑤には

倒把如意、穩坐貌背、五台山高、月周沙界

とありまた竜湫周沢「隨得集」「題安倍文殊堂」^⑥にも

小筇扶瘦到靈區、三拝起来鐘脱模、百億毛頭獅子現、五台山上没文殊

などであるが、これらが文殊の聖地と喧伝された中国五台山を示していることは言うまでもない。

我国での五台山文殊の流行の兆しは平安期まで遡る。九世紀に五台山巡礼を果たした円仁が、帰国の後に比叡山に文殊楼院の建立を發願し、これ以後しだいに流行することになった。これは、図像学的には騎獅文殊の姿である点に特色があり、具体的な事例としては四人の侍者を従えた図像が多いと言われている^⑦。周知のように、五台山の文殊信仰は「華嚴經」との関係が深い。「華嚴經」菩薩住处品には、文殊が清凉山で一万眷族のために現在も説法していると記されており、五台山における文殊信仰の盛行は、清凉山が五台山に擬せられたことによるものであった^⑧。このような事情から展開した五台山文殊には、当然のことながら修行者の上首としてのイメージが投影されることになり、これが禅僧の文殊信仰にも強い影響を与えていたようである。

一方、仏母的文殊観とは、「諸仏母」・「三世覺母七仏師」・「七仏師」・「七如来之師」・「世尊九代祖師」・「三世諸仏出生智母」などとその表現は様々であるが、つまるところ、三世諸仏は文殊の教化により信心を起こし、正覺を得たとして、文殊を仏道上の母と見るものである。一、二、例をあげてみよう。

白雲慧曉「仏照禪師語録」下卷小仏事「聖僧点眼」^⑨には、

三世智母往古覺雄、妙応普遍濟度無窮、開導過去燃燈仏、作釈尊九代師翁

とあり、文殊が燃燈仏や釈尊を化導したと記されている。また、春屋妙葩「智覺普明国師語録」卷六「童相文殊開光明」^⑩には、

金毛百億頭童子、一一毛頭關化門、大智円成師七仏、通身是眼照群昏とあり、七仏の師として群昏を照らすと記されている。

田上大秀氏は、仏母的文殊観は『阿闍世王経』の一部分を漢訳した『放鉢経』^⑧や『出曜経』に淵源を持ち、これが後に禪宗に伝わって、百丈懷海の言^⑨

文殊是七仏師亦云、是娑婆世界第一主首菩薩

に見る如く七仏の師としての文殊像が形成されたと述べられている。首肯できる見解であるが、次のような点も考慮されるべきであろう。仏母的文殊観は、前述したように、『華嚴経』などに説く菩薩の上位としての文殊像に重なる部分も大きい。例えば、藏山順空『円鑑禅師語録』『文殊大士』^⑩には

三世覺母七仏師、手中如意当鉗鎚、金毛現処全身露、誰向清凉說是非

とあり、『三世覺母七仏師』である文殊が清凉山で説法をしていると述べられているし、また竜山徳見『黄龍十世録』^⑪「文殊」にも、

（前略）居五頂山也、称万菩薩之首、得根本智也、号七如来之師、拈槌白衆也

と、『五頂山』に居し、『万菩薩之首』として、あるいは「七如来之師」として修行者を教導しているとある。更に「乾峰土疊賛騎獅文殊図」^⑫には、

七仏之師下五台、金毛獅子驚腰騎、癡人掌内智珠現、暗地還生按劍疑

などであり、『五台』山を下りた「七仏之師」文殊が人々を教化するとされている。

以上のように、多くの場合、仏母的文殊観が「五台山」「清凉山」「五頂山」などの語と共に語られている事実に注目するならば、仏母的文殊観は、『華嚴経』の説く文殊のイメージ、すなわち五台山上で菩薩の上位として説法する文殊のイメージと密接に関連しながら展開してきたものであったことが推察される。^⑬

とすれば、中世禅僧の文殊信仰の中核をなすものであったと考えられる五台山文殊と仏母的文殊観は、共に『華嚴教』と深い関連をもちながら展開してきたものであったことが判明するのである。禅宗における華嚴教学の摂取という点については、先学により既に指摘されたところであるが、文殊信仰の内容の検討からも同様な指摘が可能となる。

また、以上に述べたような文殊のイメージを、仮に「修行者型文殊」と称するとすれば、修行者型文殊は中国禅宗界においても一般的であったらしく、例えば『碧巖録』^④などにも、五台山において接化する文殊の姿や（第三十五則「文殊前三三」）、あるいは、世尊の上堂説法の開始を弟子達に告げる文殊（第九十二則「世尊陞座」）など、上述の文殊のイメージがとりあげられている。

ともあれ、以上に述べたことより、禅僧の文殊観としては中世全般を通じて、いわゆる「修行者型文殊」のイメージが一般的であり、それは、特に『華嚴経』と深い関連を有するものであったと考えてよいだろう。

三、推移する要素—（C）採薬（治病）文殊と（D）草衣文殊—

前章では、禅宗的文殊信仰の中核とも考えられる五台山文殊と仏母的文殊観について検討し、これらがともに『華嚴経』と深い関連をもち、修行者の指導者（修行者型文殊）をイメージさせるものであったことを述べた。次に、本章では、やや観点を変えて、时期的な流行の推移がかなり明確に見られる採薬（治病）文殊と草衣（蒲衣）文殊について検討してみたい。

ところで、「採薬文殊」という語は、実は筆者の造語であって、読者にはおそらく馴染みのない語であろう。まず、最初に「採薬文殊」という語について説明しておこう。

中世の禅寺では、旧暦五月五日、いわゆる端午の日に、住持の定期的な上堂説法が行われていた。そして、その住持の端午上堂法語では、「文殊令善財採薬（文殊、善財童子をして採薬せしむ）」という公案の論ぜられることが多かつ

たようである。別表の(C)採薬(治病)文殊関係の史料も大部分はこの端午上堂法語での問答を記した史料からのものであり、この点、史料的にはやや特殊な性格をもつものであると言える。この公案は次のような逸話をもとにしたものであった。

ある日、文殊の言いつけで薬草を探すことになった善財童子は薬草さがしを始める。だが大地一面に生えた薬草の前で途方にくれ、やむなく一本の薬草を採り文殊に渡した。すると文殊は「此薬亦能殺人、亦能活人(この薬草は人を殺しもするし、生かしもする)」と述べた、というものである。この逸話を典拠として形成された文殊像、すなわち善財童子に採薬を命じる文殊、これを仮に「採薬文殊」と称するとすれば、別表から判明するように、採薬文殊は主に中世前期、すなわち鎌倉から南北朝時代あたりにかけて特に流行したものであった。

採薬文殊については、かつて述べたこともあるので繰り返さない。その時の結論だけを記しておけば、①鎌倉時代から南北朝時代の禅寺においては、端午の日の住持の上堂説法の際、臨済・曹洞宗の別なく、この「採薬文殊」の公案が論ぜられていた。

②この公案自体は中国禅宗界でも時折り論ぜられたらしいが、我国ほど恒常的かつ一般的に論ぜられていた形跡はない。

③したがって、我国における「採薬文殊」の公案の異常な流行については当時の社会情勢などを考慮にいれること必要であり、その際、西大寺僧らの標榜した「治病文殊」信仰の影響などが十分推測できる、などであった。

ところで、この採薬文殊と密接な関係をもったと考えられるのが、旧稿でも述べた、いわゆる治病文殊の信仰である。ただ、治病文殊の信仰は、禅僧の間では一般的なものではなかった。現在、乾峯士曇『乾峯和尚語録』、日岩長恵『日岩長恵等法語』、天祥一麟『天祥和尚録』、與可心交著賛文殊大士^④などの文言中に例外的に見ることができ、彼らがいずれも東福寺関係の僧であることを考えれば、それが一つの特徴であったとも言えるかもしれない。

治病文殊が採葉文殊と内的関連を有するものであったことは、例えば、前述の『日岩長惠等法語』に、「使善財採葉、則直得医治塵病毛病（善財をして採葉せしめれば、則ち直に塵病・毛病を医治することを得る）」と、治病文殊の信仰が採葉文殊との関連で語られていることから窺うことができる。禅宗と医療という観点から再考すべき問題であると考えられるが、今はこれ以上立ち入らない。

治病文殊や採葉文殊がどのような經典に由来するものであるのか、現在のところ明確には不明である。『維摩經』問疾品^⑧には、文殊が病床の維摩居士を見舞い、病についての法論を行う場面があり、この經典からの影響なども考えることができるが（別表の（F）維摩との対話、と流行の時期が多少類似していると考えられないこともない）、直接的なものではないだろう。あるいは、密教經典、例えば五台山文殊と深い関係をもち死者追福や除病・治病など滅罪の功德を強調する『文殊師利宝藏陀羅尼經』^⑨（本經は鎌倉末期の西大寺僧などにも信仰された）などとの関連も予想される。もしそうであるとすれば、滅罪性を強調した南都的文殊信仰との関連を考えることもできるであろう。今後、検討すべき課題のひとつである。ちなみに、密教的文殊については、当時の禅僧の間で五字文殊信仰の盛行していたことが推測される。例えば、春屋妙葩『智覚普明国師語録』卷六「文殊贊序文」^⑩の

辛亥之冬、教二三子印、寫文殊五字秘呪、五十洛叉遍記之
の文言、また、岐陽方秀『不二遺稿』^⑪中の

五字呪寫成文殊像爲照侍者贊

更に、惟肖得巖『東海瓊華集』中「文殊大士」序文の

叔淵澄西堂、寫大吉祥五字神呪、以作尊像圖

の文言、あるいは、景徐周麟『翰林胡蘆集』「跋文殊經後」^⑫中などにも「文殊五字經」・「文殊五字咒經」の文言等々が散見される。

ところで、別表からもわかるように、この「採葉文殊」は室町時代以降の次第に衰退に向かう（仮に一四〇七年に没した空谷明応の語録史料辺りを基準に前後に二分すれば、「採葉文殊」は、空谷以前の時期に一九人中一五人、約八〇パーセント弱が集中する）。これは、ひとつには「採葉文殊」公案の討論の場であった住持の端午上堂説法自体が衰退したことも関係あるのだろうが、それと対照的に、南北朝時代以降に次第に流行し始めるのが、次に述べる（D）草衣（蒲衣）文殊である（前と同様に空谷を基準とすれば、空谷以前の時期の分布は、一七人中五人、約三〇パーセント弱である）。ただし、採葉文殊の衰退と草衣文殊の流行との間に因果関係が存するの否かという点は、興味深い問題ではあるが、現段階では不明である。

この草衣文殊は、室町期の禅宗絵画の好題材となり禅林においても盛んに描かれたのであるが、図像上の特徴は次のようなものであった。すなわち、文殊が童子相で蓬髮弊衣、手には經典を持ち、跣足姿で苦行する修業者として描かれ、我が国では特に十四、五世紀、南北朝から室町期にかけて絵画制作が盛行したと言われている。その典拠について、田中一松氏は「文殊が自ら身を化して、貧窮孤独苦悩の衆生となり、修業者の前にあらわれることを説いた経文などに、遠い淵源をたどることができよう」と述べられ、由来を『文殊師利般涅槃經』に求められているが、首肯できる見解であろう。

筆者の調査においても、例えば、彦竜周興『平陶文集』第三「跋文殊經」の

三世智佛、現童兒形、紺髮梳々、蒲衣青々、手中一卷、秘無字經

の文言や、白雲慧暎『仏照禅師語録』『梵篋印文殊』の

草衣跣足出人前、面目童蒙髮覆肩、此子誰言諸佛母、只持梵篋到驢年

あるいは、南浦紹明『円通大応国師語録』『文殊』にも

獅子騎來呈伎倆、無端現出小孩童、爭如七佛以前底、明月清風類不同

などであり、禅僧の間では蒲衣文殊が文殊の化身と見なされていた事が判明する。ただ、特に童子形という点に注目すれば、これは密教系經典からの影響も考えられるだろう。例えば、文殊の聖地清凉山を中国五台山と記したことで特筆される維密經典で、先にも少し触れた『文殊師利宝蔵陀羅尼經』^⑧には、

名大振那、其国中有山、号曰五頂、文殊師利童子遊行居住止

とあり、「文殊師利童子」と記されているのが注目されるが、そのほかにも、唐代に翻訳された文殊關係の密教儀軌、例えば金剛智訳『金剛頂經曼殊室利菩薩五字心陀羅尼品』^⑨や不空訳『金剛瑜伽文殊師利菩薩供養儀軌』^⑩などでも文殊は「童子形」とされている。このように、草衣文殊にはかなり複雑な要素がからまっており多面的な分析が必要となるが、文殊の化身という点から禅宗教団の性格を特徴づけるとすれば、次にあげるような点は特に注意しておく必要がある。

鎌倉から南北朝時代にかけて西大寺僧らが『文殊師利般若涅槃經』に依拠とした文殊会を各地で行ったことはよく知られたところである。草衣文殊も、前述したように、同經の影響を受けたものではあるが、文殊の化身に関する解釈において前代とは明確に異なる点がある。というのは、次のような点である。平安期の文殊会以来、西大寺僧らの文殊会に到るまで、文殊の化身は一般の貧窮者や病人などと考えられてきた。ところが、前述の草衣文殊はそれまでのわが国の伝統的解釈を大きく改変し、これを禅道の熱烈な修業者としてとらえたのである。これは、文殊信仰の歴史からみても大きな変化であった。禅僧の文殊信仰の中核が修行者型文殊であったことは前述したが、化身身の解釈においても従来の伝統的解釈を改変し、修行者型文殊のイメージがあたりわたったのである。禅寺内では、同じところから白衣観音や苦行釈迦像など、悟道修行を実践する観音や釈迦などの姿も好んで描かれるようになるが、これらのことも全く同様の現象と考えてよいだろう。とすれば、南北朝以降顕著になる禅宗の宗派的独立やそれにもなう変化（特に五山禅林の貴族的かつ出家主義的な性格）の中で、変化文殊に対して打ち出された禅宗的解釈、それが草衣

文殊であつたと見ることができるとはなからうか。

四、その他の要素—(E) 竜女教化と(F) 維摩との対話など—

本章では、(E) 竜女教化と(F) 維摩との対話について述べておこう。これらは一般の文殊信仰としては共によく知られた内容であり、今回検討した語録の中からも検出することができたが、その数は多くない。(E) は全体の約一四パーセント、(F) は約一二パーセントから検出された。共に一割強程度の低率である。したがって、禅僧の文殊信仰を語録・偈頌史料から見た場合、これらは共に積極的な受容がなされなかった要素とも考えられる。だとすれば、逆にむしろそのことの意味を考えていく必要もあるだろう。ただ、現在のところ、筆者はこの点について論ずる十分な準備がないので今後の課題とし、今はとりあえず、内容の紹介だけに留めておこう。

まず竜女教化であるが、これが『法華経』提婆達多品に由来していることは言うまでもない。この中で、文殊は、海中の娑竭羅龍宮に赴き竜女を教化するのであるが、その後虚空に涌出し、海上を飛行する。文殊の海上渡海の間は特に印象深いものであつたらしく、平安末から鎌倉時代にかけて絵画や彫刻の分野の好題材として、この場面は盛んに制作され、いわゆる渡海文殊形式という一つのジャンルを形成した。今回検討した禅僧の語録の中にもこれに係したものがある。規模祖円『南院国師語録』『文殊大士贊』^⑧などがそうである。同贊には「雲中騎獅子、下有出波龍(宮)」の割り注があり、前述した「渡海文殊」の圖像に著賛されたものであつたことが判明するが、この賛文には雪刃光寒星斗外、金毛影現碧雲中、一片威風生八極、煩他沙竭出龍宮とあり、これが提婆達多品に依拠するものであつたことがわかる。

そのほか、竜女教化に言及したものとしては、例えば、龍山徳見『黄龍十世録』『文殊』^⑨の

皈依龍種王、普見正徧知、雖成無上覺、俯跡興弘慈、居五頂山也

の文言、中岩円月『東海一漚別集』「文殊」^⑧の

揮劒逼瞿曇、盡思難量處、前後共三々、五雲光放五臺頂、綠樹青山色似藍、者（這）箇大聖、深究理性、猛獸穩騎、持如意柄、化龍宮侍鸞峯、身不離台山頂

などもある。鎌倉時代以降、竜女教化説（提婆達多品）が、女人成仏説へ展開するのは一般的にみられるところであるが、検討した語録からはその展開が見られない。それが、果たして語録という史料の性格に由来したものか、あるいは禅宗の宗派的性格に由来したものであるのかという点については、更に今後の検討をまたなければならない。最後に（E）維摩との対話について触れておこう。

『維摩経』問疾品には病床の維摩居士を見舞い般若空の法論を取り交わす文殊の姿が描かれている。奈良時代の文殊信仰は、この『維摩経』問疾品に強い影響を受けており、治病との関係が濃厚であった。^⑨ 前章でも多少述べたように、分布の特徴は南北朝時代までの時期に集中しており、（C）採葉文殊の分布の特徴と類似している。興味深い現象であると言えよう。

具体例をあげておけば、例えば、約翁徳俊『仏燈禪師語録』文殊^⑩には、

対維摩談不二、度三處破夏期、伎倆只如此

とあり、また竜泉令淬『松山集』謝蓀菊二侍者見問病では、

誰知世有二文殊、臥病維摩徳却無、來問灼然消不得、磔盤代我説

などである。

結びにかえて

これまで述べてきたことをまとめることで、結びにかえておきたい。

語録・偈頌等を分析することにより得られた中世禅僧の文殊信仰の特徴を要約しておけば、次の通りである。

①『華嚴教』と深い関連を有する「五台山文殊」、およびこれと密接な関係をもつ「仏母の文殊観」が全般的に検出され、これらに対する強い関心の存在していた事実が指摘できる。これらは共に彼らの文殊信仰のいわば中核をなすものであったと考えられ、そのイメージとしては、「修行者型文殊」に象徴されるものであった。

②流行の推移が時期的にかなり明確に見られるものとして、「採葉文殊」と「草衣（蒲衣）文殊」がある。「採葉文殊」とは、旧暦五月五日の、いわゆる端午の日の上堂法語で論じられた公案「文殊令善財採葉（文殊、善財童子をして採葉せしむ）」を典拠とする信仰である。鎌倉から南北朝時代あたりにかけて特に流行しており、西大寺律僧らの標榜した「治病文殊」信仰からの影響などが推測される。一方、これとは対照的に南北朝時代以降に流行し始めるのが「草衣（蒲衣）文殊」である。「草衣（蒲衣）文殊」とは、禅宗絵画の好題材ともなったが、文殊が童子相で蓬髪弊衣、手には經典を持ち、跏趺姿で苦行する修業者として描かれる点に特色がある。文殊変化身に対するわが国の伝統的解釈（貧窮者や病人）を大きく改変し、禅道の熱烈な修業者としてとらえた点に禅僧の文殊信仰としての特色がある。南北朝以降顕著になる禅宗の宗派的独立やそれにもなう変化（特に五山禅林の貴族的かつ出家主義的な性格）の中で、変化文殊に対して独自の禅宗的解釈が施されたものと考えることができる。

③『法華経』提婆達多品に由来する「竜女教化」と、『維摩経』問疾品に由来する「維摩との対話」については、一般の文殊信仰ではよく知られた内容であるが、今回検討した語録史料などからは少数例（共に一割強程度）が検出されただけであった。だとすれば、これらは共に積極的な受容がなされなかった要素と考えることも可能であろう。今後はそのことのもつ意味についても考えていく必要があるだろう。

註

- ① 同氏『悔過の芸術』七、八頁（法藏館、一九八二年）
- ② 三山進『禅刹仏殿本尊像小考』（『三浦古文化』一六、一九七四年九月）
- ③ 松浦秀光『禅宗故実尊像の研究』（山喜房書林発行、一九七六年）第二章第四節「聖僧と羅漢」参照。
- ④ 松浦前掲書第二章「仏像の諸問題と各尊別研究」の第三、四節に文殊関連の記載がある。
- ⑤ 『五山文学新集』第三卷八二頁
- ⑥ 『五山文学新集』第三卷一二二頁
- ⑦ 金子啓明『文殊菩薩像』（日本の美術三二四、至文堂、一九九二年）
- ⑧ 『大正新修大藏經』九卷五九〇頁
- ⑨ 道端良秀『中国仏教と文殊信仰』（仏教史学会編『仏教と歴史と文化』所収、同朋舎出版、一九八〇年）。
- ⑩ 『大正新修大藏經』八〇卷三四頁
- ⑪ 『大正新修大藏經』八〇卷六九六頁
- ⑫ 『大正新修大藏經』一五卷
- ⑬ 『古尊宿語録』第二（正統藏經精華選『禅学集成』第一一、芸文印書館）
- ⑭ 田上大秀『文殊菩薩物語』（『大法論』所収、大法論閣、一九八六年六月）
- ⑮ 『大正新修大藏經』八〇卷二五六頁
- ⑯ 『五山文学新集』第三卷二五六頁
- ⑰ 正木美術館蔵（島田修二郎・入矢義高監修『禅林画賛』所載、一九八七年、毎日新聞社）
- ⑱ 山田亮賢『華嚴經における文殊菩薩』（『大谷学報』四七卷二号、一九六七年二月）
- ⑲ そのほか、禅宗で重要視された般若系經典の一つである『心地観經』第三報恩品（『大正新修大藏經』三卷三二六頁）に見られる、

文殊師利大聖尊、三世諸仏以為母、十方如来初発心、皆是文殊教化力

などの文言からの影響も、十分考えることができるだろう。金子啓明氏は、仏母的文殊について、『心地観経』の文言との呼応を指摘された上で、更に『大般若経』第十四「仏母品」などに見える般若菩薩仏母観とも一体不離の関係にあることを述べられている(同氏「文殊五尊図像の成立と中尊寺経藏文殊五尊像」『東京国立博物館紀要』一八、一九八二年)。

②①例えば、鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』(東京大学東洋文化研究所、一九六五年三月)、岡田宣法『華嚴経の禅味』(『禅学研究法と其資料』二〇四頁以下、名著刊行会、一九六九年)など。

②②朝比奈宗源訳注『碧巖録』上中下巻(岩波文庫本)。

②③拙稿「東福寺と西大寺」(『日本歴史』五三七号、一九九三年二月)

②④前掲拙稿「東福寺と西大寺」

②⑤『五山文学新集』別巻第一、四八六頁

②⑥宮崎県宮崎郡佐土原町大光寺蔵

②⑦『五山文学新集』別巻第二、三六〇頁

②⑧藤井徳義氏蔵(田中一松「興可心交著賛文殊像の二作品」所載、『日本絵画史論集』所収、一九六六年、中央公論美術出版)

②⑨この問題については、拙稿「禅宗における医僧と医療の問題について」(『禅学研究』七三号、一九九五年一月)において多少

述べたことがある。

②⑩『大正新修大蔵経』第一四卷

②⑪『大正新修大蔵経』二〇卷

②⑫『大正新修大蔵経』八〇卷七〇二頁

②⑬『五山文学全集』第三卷二九〇二頁

②⑭『五山文学全集』第二卷七〇七頁

②⑮『五山文学全集』第四卷四六八頁

②⑯田中前掲論文「興可心交著賛文殊像の二作品」

②⑰『大正新修大蔵経』第一四卷

- ③⑦『五山文学新集』第四卷一一〇六頁
- ③⑧『大正新修大藏經』八〇卷四三頁
- ③⑨『大正新修大藏經』八〇卷一二三頁
- ④⑩『大正新修大藏經』二〇卷七九一頁
- ④⑪『大正新修大藏經』二〇卷
- ④⑫『大正新修大藏經』二〇卷
- ④⑬『大正新修大藏經』八〇卷三〇四頁
- ④⑭『五山文学新集』第三卷二五六頁
- ④⑮『五山文学新集』第四卷五二一頁
- ④⑯拙稿「平安期諸国文殊会の成立と展開について」(『日本歴史』四七五、一九八七年二月)
- ④⑰東京大学史料編纂所架蔵
- ④⑱『五山文学新集』第一卷六二六頁